奈文研ニュース

No.25 Jun.2007

NABUNKEN NEWS

NARA CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE

独立行政法人　文化財研究所
奈良文化財研究所
〒630-8577奈良市二条町2丁目9-1
http://www.nabunken.jp/

独立行政法人国立文化財機構の発足と奈良文化財研究所

今年の４月１日から、私ども奈良文化財研究所は、独立行政法人国立文化財機構に再編されました。新しい組織は、東京と奈良の２つの文化財研究所に加え、４つの国立博物館（東京、京都、奈良、九州）が一緒になった大きな機構です。これは、行政改革にともなう政府の方針に沿ったもので、当初、文化財をあつかう同じような組織として、国立美術館、国立博物館、文化財研究所をすべて統合しようという動きもありましたが、結果的には、美術館をのぞく国立博物館と文化財研究所が、同じ文化財保護法のもとで仕事をする組織として統合されることになりました。本部は、東京国立博物館に置かれています。

東京と奈良の文化財研究所が統合されて、一つの組織になったのは、ほんの６年前のことです。この間、たとえば国内では、高松塚古墳やキトラ古墳の保存協力、国際的にはアフガニスタン・バーミヤン遺跡の保存修復支援といった事業を両研究所が積極的に協力して進めることで、統合による成果を具体的にあげることができました。研究対象が主に動産文化財中心の東京と、不動産文化財中心の奈良といった違いはあるにしても、基本的には国の文化財保護に資する研究という強い共通基盤があったことが、比較的短期間に統合効果をあげることのできた要因であると思っています。

しかし、今度の博物館も含めた統合は、研究所同士の統合のように単純ではないと考えています。確かに、予算や人員を大きな枠のなかで運用することで、無駄が省け行政改革本来の目的に沿った運営が期待できる面はあると思います。ただ、文化財を扱うことでは共通していますが、博物館は、美術工芸品の展示と保管を中心とし、そのための収集や研究をおこなう機関です。それに対して文化財研究所は、動産不動産を問わず、すべての文化財を対象とした、さまざまな研究・技術開発をおこなっており、両者は、日常研究業務においてかなり大きな違いがあることも事実です。加えて、新機構が東京から九州までを含む、いわば、たこ足的な組織となることで、果たして機能的、機動的な組織運営ができるのかという懸念もあります。

これらの不安を解消し、真に統合による効果を発揮するためには、機構内部で十分な議論と調整をおこなっていく必要があり、少し時間がかかるのではないかと思います。研究所同士の統合でも、うまくいったとはいえ、実際には、５年かけて構築したのです。より大きな組織となった以上、そう簡単ではないと思っています。なお、奈文研自体は、昨年４月に、独法化５年間の総括をし、かなり思い切った組織改革をおこなっており、このニュースでもご報告しました。この改組は、新機構になっても引き継いでまいります。

いずれにしましても、博物館と一緒になったので、そのメリットを生かす必要があります。統合したために、それぞれの研究所や博物館の仕事が弱体化したなどというようなことはあってはならず、むしろ研究所も博物館もより事業の内容、質が向上したと国民の皆さんから評価されるように、努力をしてまいりたいと考えております。今後とも、一段とご支援、ご鞭撻をお願いいたします。

（所長　田辺 征夫）

独立行政法人国立文化財機構

- 本部事務局
- 東京国立博物館
- 京都国立博物館
- 奈良国立博物館
- 九州国立博物館
- 東京文化財研究所
- 奈良文化財研究所

発掘調査の概要

石神遺跡の調査（飛鳥藤原第145次）

都城発掘調査部では、昨年10月から石神遺跡の発掘調査をおこなっています。今回の調査は石神遺跡北方における土地利用の実態解明を目的としています。そして、今回は特に石神遺跡の北限とされる「阿倍山田道」の検出が期待されました。

「阿倍山田道」とは、『日本霊異記』や『万葉集』にも登場する古代の幹線道路の一つです。古代の大和盆地には、上ツ道・中ツ道・下ツ道という３本の南北道路と横大路という東西道路が走っていました。このうち上ツ道の南延長部分で飛鳥盆地を東西に横切り、下ツ道と交差する道が阿倍山田道です。この道路は、飛鳥の都への北からの入り口であり、飛鳥地域全体の空間配置においても重要な位置を占めていたと考えられます。

しかし、この阿倍山田道は、現在の飛鳥資料館の前を通る県道付近に位置が想定されていましたが、具体的にどこを通っていたのか、どのような規模でいつ頃に作られたのか、など詳しいことについては不明で、発掘調査による実態の解明が期待されていました。

発掘調査の結果、古墳時代以降の数度にわたる空間利用の変遷を明らかにするとともに、７世紀後半以降の阿倍山田道を検出することができました。

検出したのは、阿倍山田道の南側溝と考えられる東西溝です。これには２時期あり、７世紀後半の天武朝のものと７世紀末の藤原宮期のものがあります。

藤原宮期の東西溝は南北に並行して２条あります。1990年度に今の調査区よりも北側で行った調査では同じく藤原宮期に属する東西溝が検出されており、これは阿倍山田道の北側溝であると推定されています。そこで、この溝を北側溝とし、今回検出した東西溝のうち北側の溝を南側溝とすると、藤原宮期の阿倍山田道の規模は路面幅が約18mで、側溝間の距離は21～22mであったと推定することができます。この規模は藤原京の中では大路クラスに匹敵します。

この阿倍山田道の検出を目的とした発掘調査は、1988年以降、数回にわたりおこなわれてきました。しかし、これらの発掘調査の結果、道路に関連する可能性がある遺構は検出されましたが、いずれも断片的なもので、位置や規模を確定することはできませんでした。今回、阿倍山田道の位置や規模を明らかにできたのは、このような調査・研究の積み重ねがあったからです。継続的な発掘調査の必要性を痛感しました。

なお、３月31日に現地説明会を行いました。約1,100人の方々にお越しいただき、飛鳥に対する皆様の関心の高さを目の当たりにしました。

・・・さて、調査最終盤に至って、７世紀後半よりも古い時期の阿倍山田道の存在も明らかになりつつあります。また、道路の基礎工事として、基底部に木の枝や葉を敷く、敷葉工法という古代の土木工法が用いられており、この枝葉の上に土を積み上げて道路を造っていたことも分かってきました。

今回の発掘調査によって阿倍山田道の姿をおぼろげながらもつかむことができそうです。今後の調査・研究にご期待下さい！

（都城発掘調査部　小田 裕樹）

調査区全景（東から）

道路下部に敷かれた枝や葉（東から）

平城宮東方官衙地区の調査（平城第406次）

昨年の12月から今年の５月にかけて、平城宮の中枢部にあたる東区朝堂院と東院地区にはさまれた東方官衙地区の発掘調査をおこないました。

本調査地の周辺では、通称磚積（せんづみ）官衙（遺構展示館）、推定宮内省、造酒司などの役所の存在が明らかになっています。また、宮内省と磚積官衙の間には、平城宮のなかでもとりわけ重要な基幹排水路であった東大溝の存在も確認されています。今回は地下探査もおこないつつ、幅６m、長さ100m内外の調査区を縦横におよぼした試掘的な発掘調査です。

発掘調査の結果、東大溝の東側には、東西約50m×南北約120m以上の役所の区画が存在し、少なくとも２時期の変遷があることが分かりました。また、この区画は東西築地によって仕切られていたようです。区画内の北半には、桁行２間以上、梁行１間の掘立柱建物１棟、桁行２間以上、梁行２間の礎石建物１棟が確認され、区画内の南半には、礎石建ちの大型基壇建物を中心とし、その南に、桁行10間以上の南北に長い基壇建物を対称に配置していたことがわかりました。

さらに、東大溝の西側、東区朝堂院との間では東西に庇（ひさし）を付けた桁行２間以上、梁行２間の大型基壇建物が検出され、この地区にも役所が営まれていたことが確認できました。

あわせて、これら２つの役所の間を流れていた東大溝は今回の調査地でも確認され、300点を超える木簡が出土しています。

東方官衙地区はこれからも継続的に発掘調査をおこなっていきます。今後の調査の進展にどうぞご期待ください。　（都城発掘調査部　粟野 隆）

調査区全景（南東から）

西大寺薬師金堂の調査（平城第422次）

今回の調査は、奈良市西大寺小坊町にある浄土院境内において実施しました。浄土院境内はかねてより西大寺薬師金堂の基壇跡と考えられてきました。

今回はまず南北３m、東西15mの調査区を設定し、後に中央部を北に拡張して調査を行いました。調査は４月16日より開始しました。

表土を除去すると、薬師金堂の基壇面を確認することができました。そしてその基壇を掘り込んで、凝灰岩を２個据え付けた穴が東西に２基並ぶ状況を確認することができました。これらの穴は薬師金堂の礎石を据え付けるための「壺掘地業」の痕跡と判断できます。これらの穴の西側でも２箇所で大きな抜取穴を確認しました。これらの抜取穴と地業の痕跡がほぼ15尺等間で並ぶことから、これらが薬師金堂の身舎（もや）の痕跡にあたると想定できます。さらに、身舎の北側においても礎石の据付穴および抜取穴を２箇所で検出しました。身舎との柱間は12尺で、北側の庇にあたると考えられます。これらの庇の据付穴の中にも、凝灰岩が確認できました。なお、南側の庇に関しては大きく基壇が削られていたため、痕跡を確認することができませんでした。

奈良時代に記された『西大寺資財流記帳（るきちょう）』によると、薬師金堂は東西119尺、南北53尺の非常に大型の建物と記されていますが、今回の調査で初めてその詳細な実態を明らかにすることができました。

（都城発掘調査部　林 正憲）

薬師金堂・身舎北側柱列の状況（西から）

保存処理前の出土鋸（実寸）

石神遺跡出土の鋸（のこぎり）

2006年の石神遺跡18次調査で出土した木柄付き鋸です。天武・持統朝（７世紀後半）の溝からみつかったもので、木製の柄が完全な形を残していました。現存長は44.5cmですが、使われていた当時は、もっと長く、立派な歯を兼ね備えていたと思われます。

石神遺跡のものと似た鋸が、法隆寺の献納宝物にあります。それは、奈良時代に製作されたと考えられており、石神遺跡出土鋸と時期的に接近しています。両者は柄の形態が似るなどの多くの共通点があり、古代の鋸として比較検討が可能となりました。

鋸の出土例は全国でも少なく、また、ほぼ完全な形を残して出土した例は他にないため、大変貴重といえます。そして、都城周辺地域において鋸が出土した意義は大きく、古代の建築技術や大工道具の歴史を考える上で大きな手がかりとなるでしょう。

（都城発掘調査部　長谷川 透）

保存処理された出土鋸

重要文化財に２件指定

今年３月、山田寺跡（桜井市山田）出土遺物および平城宮跡内裏北外郭官衙出土の木簡群が、重要文化財に指定されました。

山田寺出土の考古遺物

山田寺の発掘調査は1976～96年に11次にわたって断続的におこなわれました。とりわけ注目を集めたのは、土砂崩れで倒壊した回廊の建築部材が、おびただしい屋根瓦の下敷きになりながらも、組み合わさったまま出てきたことでした。

しかもこれらは、現存する世界最古の木造建築である法隆寺金堂よりも半世紀ほど古い７世紀中頃のものでした。法隆寺の建築と比較すると、柱のエンタシスなど共通する部分もありますが、扉の軸の上部を支えるのに、長押（なげし）を使わず藁座（わらざ）という部材を用いるなど、現存する古代建築ではあまり一般的でない技法も見られます。飛鳥時代の建築の多様性を証明する、あらたな古代建築の発見だったのです。

その後、保存処理を経て、飛鳥資料館に展示されている回廊３間分の部材92点が、このたび重文の指定を受けました。出土建築部材の指定は全国初であり、名実ともに文化財の仲間入りです。

建築部材とともに出土したおびただしい数の瓦も指定を受けました。出土数は軒瓦だけで５千点以上、丸・平瓦などもふくめると１万点は下りませんが、今回は、そのうちのごく一部、563点が対象です。７世紀中頃の創建期の瓦をはじめ、1187年に興福寺の僧兵が薬師三尊を強奪した後の再興期の巴文軒丸瓦まで、山田寺の屋根を飾った瓦のオールスターが勢揃いしています。

指定された瓦は、軒先を飾る軒丸・軒平瓦だけでなく、丸・平瓦、屋根を支える垂木の先端にとりつける垂木先瓦、破風（はふ）の先端に葺く蠡羽（けらば）瓦、大棟の両端を飾る鴟尾（しび）、鬼瓦、文字・戯画（ぎが）瓦など多岐にわたります。なかでも垂木先瓦には蓮華紋の瓦当に朱・白・黒の彩色が施されているものがあり、軒先を華麗に飾っていたことがうかがい知れる貴重な資料です。

『上宮聖徳法王帝説』裏書や『日本書紀』によると、山田寺の造営は643年の金堂建立を嚆矢としますが、649年に発願者である蘇我倉山田石川麻呂はじめ一族が自害したために一度中断します。その後、天武朝に再開されて塔は676年に、講堂は685年に建立され、ようやく伽藍が完成をみます。瓦の製作技法を細かく分析して変遷を追うと、この史実におおむね整合することがわかります。さらに、塔に葺く瓦を造営中断以前に準備していたこと、奈良時代に金堂や塔の全面的な修理をおこなったことなどが明らかになりました。

このように、瓦は建築部材の一部ですが、瓦当文様や製作技法を研究することで建物の造営過程や氏族と寺のつながりなど様々なことがわかります。今回の重要文化財指定が、瓦に対する理解や重要性を一層深める契機になればと願っています。

そのほかは、礎石・壁土を含む建築部材88点、五尊仏１点、押出仏３点、磚仏39点、石燈籠の破片１基分、飾金具や釘などの金属製品137点、ガラス小玉３点、土器・土製品106点、建築部材を除く台脚などの木製品51点、砥石などの石製品14点、銭貨15点、木簡27点が指定されました。今秋には、飛鳥資料館にて重要文化財指定記念の特別展を開催する予定です。こちらもお楽しみに！

（都城発掘調査部　箱崎 和久・石田 由紀子）

指定を受けた回廊部材の出土状況（1984年）

金堂の軒瓦

平城宮内裏北外郭土坑SK820出土木簡

このたび、平城宮跡内裏（だいり）北外郭官衙の土坑SK820から出土した木簡群（『平城宮木簡１』で報告）が、重要文化財に指定されました。指定点数は1785点、完形の木簡から縦割きにされた断簡や折れた破片、微細な墨付きだけの削屑まで、一括しての指定です。平城宮跡出土木簡としては、2003年の第１号木簡を含む39点の指定に次ぐもので、これにより、平城宮跡出土木簡約５万点のうち3.6％が重要文化財になったことになります。

今回指定された木簡群は、内裏の北東に位置する官衙内の一辺約3.8m深さ1.7mの方形のゴミ捨て穴から見つかったものです。聖武天皇の平城還都（745年（天平17））後の周辺官衙の改修に伴う遺構とみられます。発見は平城宮跡で最初の木簡が見つかってから２年後の1963年のことでした。

1000点を超えるような木簡の発見は今ではけっして珍しくはありませんが、木簡の使用がこれほどの規模で行われ、しかも良好な状態で残っていようとは思いもしなかった当時、SK820出土木簡の整理・解読は、きっと試行錯誤の連続だったことでしょう。鮮やかに残る一文字一文字を解読し、文章としての意味を見出だすごとに、新しい史料の発見に心を躍らせた、まさに日本の木簡研究の黎明です。

洗い出し・記帳（木簡のスケッチ）・写真撮影・水漬け状態での収納（1980年代初頭まではホルマリン漬け。その後はホウ酸ホウ砂の水溶液）・概報や図録の刊行といった整理・解読・公開の流れ、あるいは木簡を文書、付札（荷札・付札）、習書・落書、その他に分ける内容分類や、型式番号による木簡の形態分類、また木簡を情報の多寡による区別を付けずに、遺物として一括して平等に扱うという木簡に対する基本的なコンセプト、そして何よりの木簡が文字資料である以前にもつ考古資料としての属性の重視、そういう私たちが日頃あたりまえのように考えている事柄が、みなこのSK820出土木簡の整理・解読から始まっていることに驚かされます。

SK820出土木簡の解読が、今日の木簡研究の基礎を形作ったのでした。これは偶然とはいえ日本の木簡研究にとってまことに幸いなことでした。ある研究者は平城宮跡を「地下の正倉院」と絶妙に評しましたが、SK820の木簡はまさに「地下の正倉院文書」の理想的な一群といえるでしょう。

整理・解読のノウハウとともに、保存・活用のノウハウもこのSK820出土木簡によって確立したことを忘れるわけにはいきません。

日本の木簡は、たっぷりの水分のある環境で日光と空気（酸素）から遮断され続けるという環境に恵まれて初めて、木質が腐らずに、かつ墨が消えずに残ります。水が木簡の命の源なのです。

言い換えれば、木簡は非常に脆弱な資料であり、このままでは重要文化財指定には適しません。科学的な保存処理を行って安定した状態にあることが、指定の要件とされています。全点の保存処理が終了し、安定した状態になったからこそ、今回発掘から45年近くを経てようやく一括して指定に漕ぎ着けることが可能になったのです。

このように、最初の出土から45年以上にわたる奈文研での木簡研究の総合的な蓄積が、今回の重要文化財指定に結実したといえるでしょう。

ところで、保存処理が済んでも、木簡は環境の変化にとても敏感なので、温湿度管理のできる収蔵庫に保管する必要があります。今後の永久保存を図ることが1200年地中に保存されてきた資料を掘り出してしまった私たちに課せられた責務であるからです。そのため限られた期間にはなってしまいますが、今秋平城宮跡資料館において、今回指定されたSK820出土木簡の特別展示を企画しています。1260年余り前の生の文字を直接ご覧いただき、「地下の正倉院文書」を体験していただければと思います。どうかご期待ください。

（都城発掘調査部　渡辺 晃宏）

縦に割いて籌（ちゅうぎ）木に二次利用された木簡　　役所間の手紙の木簡とその断片

飛鳥資料館のみどころ(14)

展示品解説　その６
「あすかの今昔」

この春、飛鳥資料館のエントランス展示が大幅にリニューアルしました。「あすかの今昔」と題した新展示。「あすか」の現代と飛鳥時代の対比を実感できる、大胆な配置が魅力です。展示コーナーではキトラ古墳から大官大寺にかけての１/500の航空写真を床面に敷き、古代飛鳥の中心部に同スケールの飛鳥京復原模型を置きました。奥の壁面には大和三山を背景とした飛鳥のパノラマ写真があります。いわば、現代の景観から古代の飛鳥を浮かび上がらせたような展示。時代の対比と連続性を実感していただければと思います。

この展示の中心をなす模型は、古代飛鳥の中枢部を、東西900m×南北1650mにわたって復原したものです。南側には橘寺、川原寺の伽藍が見え、その東には天武天皇の飛鳥浄御原宮があります。ほぼ中央には蘇我氏が建立した飛鳥寺の一塔三金堂の伽藍、その西側には石敷の槻木広場が広がります。北側には水落遺跡の漏刻台が建ち、石神遺跡には斉明天皇の迎賓館の建物が並びます。飛鳥時代から奈良時代にかけて、飛鳥地域に展開した宮殿や建物などのさまざまな施設が一望できます。

この模型は、「飛鳥・藤原京展」の際に、発掘調査の成果に基づいて製作されました。模型の製作から早５年。飛鳥の発掘は現在進行形で、日々新たな発見があります。そこで、この模型は新たな発掘成果を反映させた改造を適宜加えながら「進化する模型」としていきたいと考えています。今回、常設展に展示するにあたっては、近年の発掘成果をもとに、川原寺の北面大垣の位置や、経楼と鐘楼の構造などを変更しました。今後も、発掘調査の新知見を、わかりやすくお見せしていきたいと思っています。　（飛鳥資料館　西田 紀子）

大勢の見学者でにぎわう展示コーナー

■　記　録

埋蔵文化財担当者研修

○遺物観察調査過程
６月４日～29日　　６名

現地説明会

○平城第406次（第二次大極殿院東方官衙地区）
平成19年３月24日（土）　　450名

○飛鳥藤原第145次（石神遺跡第19次）
平成19年３月31日（土）　　1153名

平城宮跡資料館展示

○速報展「西大寺食堂の井戸」
平成18年11月21日（火）～５月16日（水）

飛鳥資料館春期特別展

○「キトラ古墳壁画四神玄武」
平成19年４月20日（火）～６月24日（日）

○キトラ古墳壁画「玄武」特別公開
平成19年５月11日（金）～27日（日）

講演会（NPO平城宮跡サポートネットワークと共催）

○平成19年５月20日（日）午後１時～
「平城京寺院の造営－木簡からの考察」
舘野 和己　奈良女子大学教授

公開講演会（第100回）

○平成19年６月16日（土）午後１時30分～
「年輪年代学とデジタル画像技術」
大河内 隆之　埋蔵文化財センター研究員
「西大寺伽藍に迫る－最新の発掘調査成果から－」
林 正憲　都城発掘調査部研究員

■　お知らせ

平城宮跡資料館展示

○速報展
「奈良時代の霞ヶ関か－平城宮東方官衙地区の調査」
平成19年６月１日（金）～７月１日（日）

飛鳥資料館　夏期企画展示

○「『とき』を撮（うつ）す－発掘調査と写真－」
平成19年８月１日（水）～９月２日（日）
発掘調査を支えてきた奈良文化財研究所の写真室。その技（わざ）術を、貴重な写真資料と機材を通して紹介します。

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　http://www.nabunken.go.jp
E メール　jimu@nabunken.go.jp
発行年月　2007 年６月